

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 前田 和泉 印

学位申請者 イドジーエヴァ ジアーナ

論文名 「今村夏子の作品における暴力性——ディスコミュニケーションと排除のシステムをめぐる——」

【審査結果】

前田和泉を主査とし、主任指導教員の加藤雄二、副指導教員の西原大輔、外部委員として、2022年度まで主任指導教員であった沼野恭子（本学名誉教授）および島田雅彦（作家、法政大学教授）から成る審査委員会は、2025年5月11日に上記論文の審査並びに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文は、現代日本文学において特異な存在感を有する作家・今村夏子の作品群を対象とし、彼女の作品に内在する暴力性や排除のメカニズムを分析した上で、その作品が現代日本社会においてどのような意義を持ち得るのかを考察することを目的としている。今村夏子は主要な文学賞を多数受賞し、文壇での評価を確立しており一般的な知名度も高いが、現時点では研究や外国語への翻訳は少ない。本論文は今村研究の嚆矢として位置づけられよう。

本論文は、序章+3章にて構成されている。まず序章において問題設定を説明した後、第1章「主人公像」では、今村夏子の代表作を中心に、主人公像の特徴とその変化を論じている。第1節では『こちらあみ子』の主人公あみ子に着目し、作中におけるディスコミュニケーションと排除のメカニズムに焦点を当てる。今村作品の登場人物は常に社会との軋轢を抱え、それが暴力や共同体からの排除につながる。あみ子も周囲の感情を理解できず家族からも排除されるが、その解釈は多様である。あみ子は「障がい者」とみなされがちだが、イドジーエヴァ氏は、彼女が既存の常識を独自に再構築しているのであり、「障がい者」という枠組みで解釈するのは一面的にすぎないと指摘する。第2節では語り手の立ち位置の変化、特に三人称から一人称への変化に焦点を当て、主に『むらさきのスカートの女』を考察対象としている。同作は一人称小説であり、語り手（「黄色いカーディガンの女」）があたかも対象（「むらさきのスカートの女」）の内面を知り尽くしたかのように語るが、その語りには嘘や妄想が含まれる可

能性があり、読者は鵜呑みにできない。語り手は対象に執着し自己を重ねることで孤独から逃れようとするが、描写される対象は実は語り手自身の姿を映し出すものでもあり、伝統的な文学における客観的な語り手とは異なる、自己と対象が二重写しになる特異な語り口であると論じられる。第3節では主人公の「自我の不安」と「透明な存在」化に焦点を当てる。『あひる』では登場人物（特に親）が他者（子供やあひる）を「記号」として消費し代替可能と捉えている。一方、主人公は容姿の描写がなく「輪郭のはっきりしない透明な存在」として描かれる。今村作品の主人公たちの多くは受動的で感情や内面を言語化できないため、抱える問題が未解決のまま残され、それが自我の不安や存在感の希薄さに繋がっているとイドジーエヴァ氏は指摘する。第4節では登場人物の自我形成における家族の役割に着目し、『星の子』を中心に分析している。親子間のディスコミュニケーションにより、主人公ちひろは感情を言語化できず親に理解されない。家族空間から生まれる自我の不安は今村作品を貫くテーマだが、ただしそれは単に家族の影響のみに帰されるのではなく、複雑な要因が絡み合っていると考察される（その点について詳しくは続く2～3章で掘り下げられている）。

第2章では、今村作品における暴力と排除のシステムが考察される。今村作品においては物理的な暴力よりも精神的な暴力やディスコミュニケーションが多く描かれており、本論では主にそうした「目に見えない暴力」に焦点を当てている。第1節では言葉による暴力とディスコミュニケーションを取り上げている。言葉の暴力性は沈黙を通して現れ、登場人物間に言葉が足りない現象がしばしば見られるとイドジーエヴァ氏は指摘する。『むらさきのスカートの女』では一方的な執着のみで相互的なコミュニケーションがなく、『こちらあみ子』では言葉の機能不全が「壊れたトランシーバー」のエピソードにおいて象徴的に描かれる。『父と私の桜尾通り商店街』では家庭内と商店街内部のそれぞれにディスコミュニケーションが生じている。こうしたさまざまなレベルでのディスコミュニケーションは現代社会の孤立感を浮き彫りにし、それが暴力と排除に繋がっていくとされる。第2節では「遊び」や「ゲーム」の描写が分析される。『的となった七未』では、物を人に当てる遊びが繰り広げられるが、物に当たらない特殊能力を持つ主人公は共同体に加わることができないままである。『むらさきのスカートの女』では、公園の子供たちや職場の同僚との「ゲーム」を通して「むらさきのスカートの女」は共同体の「プレイヤー」たる資格を一時的に得るが、語り手は最後まで主体的なプレイヤーになることができない。「遊び」は社会の仕組みを象徴し、そのルールに従えない者は排除される構造になっている。一方、排除される主人公たちは「片思い」という別の「ゲーム」に耽っている。妄想により特定の相手へ執着するが、実際には何も行動を起こすことのない彼女たちは、それによって現実逃避や自己防衛を行っているのであり、この場合の「ゲーム」は自己を他者から排除する機能を果たしている。第3節では作中に描かれる暴力の様相が分析される。あみ子の一方的な言葉がのり君を傷つけ物理的暴力を誘発したり、『星の子』で南先生がちひ

るを言葉の暴力で傷つけたり、『貯金箱』の主人公が抑圧的な夫の前で「声をなくした」状態になったりするなど、作品は精神的暴力に溢れているが、登場人物はそれに無自覚なままでトラウマは放置される。暴力の原因は主にディスコミュニケーションだが、主人公たちは自己を語る言葉を持たないため、相手との意思疎通によってそれを解消できないでいる。第4節では今村作品を貫く主要テーマである「排除」のメカニズムが論じられる。イドジーエヴァ氏はルネ・ジラルドを援用し、あみ子や与田正は暴力の連鎖を止める「生贄」として社会から追放されるのだと論じる。排除は理解できないものを恐れる人間の自己防衛本能の現れであり、共同体の平和を脅かす「生贄」が追放されることで共同体の絆は強められる。

第3章では、今村作品における社会性に焦点を当て、主人公たちが現代日本社会で果たす役割や、女性であることが孤立や排除に与える影響を考察する。第1節では今村作品の主人公たちが現代社会の産物であり、疎外されつつも社会に属する存在であると論じる。社会の絆を強める排除システムにおいて、「普通」から外れた者を「異常」とラベリングし消費・利用するメカニズムが今村作品では描かれている。排除される者だけでなく、自我の不安を抱え、それを埋め合わせるため他者を一方的に利用する登場人物もいる。これは自己肯定感の低さや自己責任への恐怖に根差すもので、多くの登場人物がこのメカニズムに支配され、他者を排除しても自我確認は実現せず、相互理解が不可能なまま物語は終わってゆく。第2節では、精神的暴力により傷ついた登場人物たちが、トラウマをいかに克服しようとしているかに焦点を当てる。『せとのママの誕生日』では身体の一部を商品化されて傷ついた女性たちが集団セラピーのように過去を語り合い、『ひょうたんの精』のなるみ先輩は自己受容へ一歩踏み出すが葛藤は未解決のままである。『木になった亜沙』の亜沙は自己否定・自己犠牲に生きがいを見出す。イドジーエヴァ氏はこれらについて、他者を通じた自己再生の寓話だが、自己評価を外部に委ねる危険性も孕むと指摘する。第3節では「居場所探し」のテーマを論じる。主人公たちはいずれも安定した居場所を持たず、家ですら安心できない空間であることが多い。居場所は他者の中に求められることもあるが、やはり一時的なもので終わり、孤独感が強調されている。第4節では女性性に着目し、女性であることが排除にどう影響し、女性の共同体がどう描かれているかを考察する。『冷たい大根の煮物』では一時的だが互いを支え合う女性共同体が描かれ主人公の自立成長に繋がることが示される。『父と私の桜尾通り商店街』ではパンを介した女性同士の束の間の連帯が描かれる。『ルルちゃん』では人形を経て女性との交流で感情を取り戻し、『七月三十一日晴れ』では共同体の中でトラウマを克服し居場所を得る珍しい事例が示されている。

以上のように、本論文は今村作品に見られる現代社会における排除と暴力、そしてディスコミュニケーションの構造を解き明かすことを試みている。作品で描かれる暴力性や排除のメカニズムは、単なる個人的な問題に留まらず、より広範な社会構造の一端を浮き彫りにする。今

村夏子は排除、孤独、居場所探しといったテーマを通じて、現代社会の問題だけでなく、人間社会における普遍的な問題を提示していると本論文は結論づけている。

【審査の概要及び評価】

試験席上では、冒頭で学位申請者によって本論文の概要が説明された。続いて、各審査委員より本論文を評価できる点として、次の点が挙げられた。

1. 今村夏子という現役作家の（博士論文提出時点における）ほとんどすべての作品を読み込んだ上で、さまざまな角度から独自の考察を行っている。今村作品における重要なテーマやモチーフがあぶり出され、随所で説得力のある指摘がなされている。また、今村本人とのメールによるインタビューを実現させ、それをテキスト分析の中で有効に活用している。
2. 物理的な暴力、言葉による暴力、ネグレクト、トラウマなど、「暴力」をめぐるさまざまな表象を、よくありがちなジェンダー論やトラウマ論、ポリティカルコレクトネスの議論などに安易に頼るのではなく、テキストに即して丁寧に読み解いている。
3. ナラティブ分析によって登場人物の無意識を精神分析する手法が興味深い。
4. 日本語による表現力が極めて高く、日本語非ネイティブであることをまったく感じさせない。
5. 論文執筆のプロセスにおいては計 3 回の事前審査を行ったが、その際に指摘された点に極めて的確かつ迅速に対処した。結果として、今後の今村研究に際して基礎的な文献となるべき論考に仕上がっている。

一方、質疑応答では主に以下の点が提起された。

1. 佐々木敦は「今村夏子の小説は、まだ名称を持っていない、まったく『あたらしい小説』なのかもしれない」（本論 p. 5）と評しており、この「あたらしさ」を暴力という視座から解明するのがこの論文の目標の 1 つだったと思われるが、これまでの日本文学にない今村の新しさ、独創性というのは、結局のところ何なのか。
2. 3 章で論じられているのは、暴力性というよりむしろケアの可能性のように思われる。シスターフード、疑似家族、食べ物のシェアが、トラウマを乗り越える手段であるように読める。それらに共通する「共感力」について、今村作品での位置づけをどのようによどのように捉えているのか。
3. p. 26 でフロイトに言及しているが、「二重写し」や「鏡」などの考察はむしろジャッ

ク・ラカンを援用すべきだったのではないか。

4. 個人のトラウマ体験の持つ個別性や特殊性を社会的・普遍的なものに結びつける帰納法的な考察をすることで、二分法的でわかりやすいトラウマ対処法をとらない今村作品の特徴をより浮かび上がらせることができたように思う。曖昧で、相手の言わんとする内容を察することが求められる日本的コミュニケーションの構造的問題と結びつけて論じることもできたのではないか。
5. p. 10 では今村作品は「現代日本の産物」と述べられているが、p. 125 では「今村は〔中略〕人間社会における普遍的な問題を暴いている」とされている。今村夏子は日本的な作家なのか、それとも、より普遍的なテーマを扱う作家なのか。
6. 今村作品の登場人物は他者なしで自我の確認ができず、それゆえ「自我の不安」に捉われると論じられているが、そもそも人間はみな他者なしでは自我の確認ができないのではないか。
7. 本論では「共同体」「コミュニティ」が裏のキーワードになっている。登場人物たちは共同体から「排除」されるが、実際には共同体を求めるからこそ孤立し、共同体からの暴力を受けることになっている。「共同体を求める志向」に着目すると、「孤立」「排除」とは逆向きの結論が導き出せないだろうか。

これらに対し、イドジーエヴァ氏は以下のように回答した。まず 1.については、結局のところ端的に名づけることはできなかったが、今村はリアリスティックな手法をとりつつ現実主義のみにとはとどまらず、徹底して人間の「内面」を書くことに特化した作家であるとの認識を示した。2.に関しては、新しい作品であるほど「共感力」への意識が強まっているのは確かである（この点に関して、3 章 4 節で取り上げられる作品を時系列順に出した方が、その変化をより明確に示すことができたとの反省が述べられた）。3.については、初稿段階ではフロイト以外の精神分析理論も援用していたが、議論の軸がぼやけてしまうためフロイトのみに限定することになったと説明された。4.に対しては、そもそも文学は社会の現れであり、現代社会に内在する暴力が今村作品には投影されている。自身の関心の出発点もそうした社会的側面にあったが、今回はあくまでも「文学テキスト分析」という枠組みの中で論じたと述べられた。5.に関しては、今村には二面性があるとの回答であった。つまり、あくまで日本社会を描いているので日本にしか生まれ得ない作家と言えるが、極めて日本的でありつつ人間普遍の問題に開かれていくテーマを扱っている。であるからこそ、国籍は違う読者も同じ問題を抱えていると感じることができるのだとイドジーエヴァ氏は説明した。6.については賛同しつつ、ただし今村作品の登場人物は他者への依存の強さが一般的な自我確認のレベルを超えているのだとの認識が示された。7.についてもそのような構造になっていることを認めつつ、共同体を求めつつも

そこになじむことのできない「ホームレス」状態にフォーカスすることが本論の主眼であったと述べられた。

他にも、「自我の不安」という用語の曖昧性や、第1章冒頭で示される作家のタイプ分けが恣意的であること、ゴゴリとの比較（p. 27）がやや唐突であること、参考文献一覧での今村作品の提示の仕方に工夫の余地があることなどが指摘された。これに対してイドジーエヴァ氏は、自身の見解を明確に示した上で、本論に不足している点については率直に認め、現時点での課題をしかるべく認識していることが確認された。

最後に、今後の研究をどのように展開すべきかという質問に対しては、審査委員も含めて様々な意見が述べられた。本論に関しては、今村夏子研究のパイオニアとして何らかの形で公開すべきであるが、ただし読者ターゲットを考えると商業出版での発表は不向きである。従って、今村以外の現代日本作家や、あるいは世界文学における暴力とトラウマ表象へも視野を広げ、より幅広い読者層にアピールするような形での出版を目指すべきであるという点で意見が一致した。

全体として、本論文は今村夏子研究のパイオニアとして高い価値を有しており、審査委員から指摘のあった若干の問題点についても、本論文の意義や学術的価値を損なうものではないと判断された。審査員からの質問に対するイドジーエヴァ氏の応答は逐一明確であり、質疑を重ねる中でさらに研究テーマに関する考察が深まるような建設的な議論が繰り広げられた。文学研究の博士論文を審査する醍醐味は、まさにこのような対話の中にあると言えよう。

以上のとおり、博士論文の評価および最終試験での質疑応答の内容から、審査委員は全員一致で、学位申請者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。